ジャン・ボダン『七賢人の対話』
――虚無か調和か――

菊地英里香

はじめに

ジャン・ボダン（1529/30-1596）の遺稿『七賢人の対話』*Colloquim heptaplomeres de rerum sublimum arcanis abditis*（『至高のことがらの隠された秘密についての七賢人の対話』）[1]は、ボダンの生前に出版されることはなく手稿のまま残され、その死後 2 世紀半のあいだ写本の姿で流布していた [2]。かつてこの書物に惹きつけられた人物たちの中には、グロティウスとライプニッツの姿がある。グロティウスは、『キリスト教の真理について』を執筆していた時に、取り上げるべきあるいは論争すべき題材を求めて『七賢人の対話』の稿本を読んでいる。結局、グロティウスは彼の要求に見合うような内容をこの書物の中から得ることはできなかったが、これを「最も価値のある読み物」と評した。それと同時に、記憶に頼っているため引用が曖昧だとの批判も加えている [3]。

ライプニッツは生涯で 2 度この書物を読み、2 つの異なった判断を下している。彼が『七賢人の対話』を初めに読んだのは、21 歳から 24 歳のあいだである。ライプニッツは多くの人々を害することになるからという理由で、「この書物がいつか刊行されるのをおそれる」と述べた。彼は『七賢人の対話』への反駁を書いてさえいた。ライプニッツがこの書物を 2 度目に読んだのは晩年のことであり、評価は一変している。彼は「ボダンの著作は博識ある人々の念入りな注釈をつけて刊行される価値がある」と

---

[1] テクストとして使用したのは François Berriot (éd), Jean Bodin, *Colloque entre sept scavant qui sont de differens sentiments, Genève*, 1984.

[2] 写本のコピーはフランス，ドイツを中心に多数残されている（*ibid*., LI-LX）．なお，『七賢人の対話』が初めて出版されたのは, 19 世紀半ばのことである．

[3] Henri Baudrillard, *Jean Bodin et son temps,Tableau des théories politiques et des idées économique au seizième siècles*, Paris, 1853, Aalen(Scientia Verlage), 1964, p.193.

記している[4]。

本稿の目的は『七賢人の対話』にまつわるいくつかの問題点を取り上げ、今後の研究の足掛かりとすることである。まず、はじめにこの書物が日の目を見るに至るまでの経緯と物語のアウトラインを紹介する。次に7人の対話者のうちの誰がもっともボダンの考えを代弁しているか、すなわちどの登場人物がボダンなのかという問題を扱う。そして、本書の結末とボダンにとってカトリック教会のもつ意味について考察してみたい。

1. 執筆の年代をめぐって

この作品はボダンが63歳頃、すなわち1593年頃書かれたと考えられてきた。その根拠は、ラテン語写本の多くに付記されていた＜H.E.J.B.A.E.LXIII＞という文字列にある。この文字列は様々に解釈できる。例えば「Haec ego Johannes Bodinus Andegavensis scripsi anno aetatis LXIII. 私、アンジュの人ジャン・ボダンが63歳の時にこれらを書いた」、あるいは、「Hic Est Joannes Bodinus Andegavensis, Suae Anno Aetatis LXIII. アンジェの人ジャン・ボダンが63歳の時にこれらの書簡を書いた」など。『ジャン・ボダンとその時代』の著者であるボードリヤールによれば、パリ王立図書館に残っているフランス語の訳本に＜J.B.A.C.C.L.A de LXIII ans＞と書かれたものがあり、これは「Jean Bodin Angevin Composa Cette Lettre Agé 63 ans. アンジュの人ジャン・ボダンがこの書簡を書いた」と読める[5]。「epistlam」あるいは「lettre」という言葉は、この書物が書簡としてある人物に宛てられているために用いられた。

ところで、ボダンの「63年目の年」というのは、彼が1529年の後半から1530年の前半に生まれたと推定されることから、1591年、1592年、1593年のうちのいずれかである。もちろん、我々はこの著作全体が「63年目の年」に書かれたと結論づける必要はない。あるいは、この「63」という数字は数秘学的な重要性からボダンによって選ばれた可能性もある（7と9は転換の年を生み出すとボダンは考えていた）[6]。

---

[4] *ibid.*, pp.194-195.
[5] *ibid.*, p.191,
[6] Noel Malcolm,≪Jean Bodin and the authorship of the Colloquium Heptaplomeres≫, dans

『七賢人の対話』の執筆時期については、ボダン研究者の清末尊大も「難しい問題がある」とした上で、推定を試みている[7]。清末は、1593 年とする通説を「ボダンの自筆原稿にあったものか、それとも筆写した者が遺族から聞いて、あるいはボダンの男の寿命（7×9）の理論から書き加えられたものか判断できず」、根拠がないものだとした。それゆえ、著作の内容から年代を推定している。彼によれば、それはネーデルラトから帰国した 1583 年から死ぬ 1596 年までの間のことであり、おそらくはネーデルラントから帰国後専念したラテン語版『国家論』の完成後の 1585 年からランの町を脱出した 1594 年までの間に書かれたことは間違いないという。さらに、同時期に書かれていた『自然の劇場』（1590 年には完成していた）の方が 2 つの個所において天文学の知識が増し[8]、『七賢人の対話』の見解が否定されていることから、1589 年までに書かれていたとする。清末は 1586 年の可能性が高いと推測している。その理由は、対話を記録した「私」が書簡を宛てた相手である N.T がボダンの義兄弟ニコラ・ツルイヤールであり、彼が死ぬ以前に書かれた可能性があることと、第 2 篇は 7 月 15 日の火曜日に着いた手紙をめぐって会話が始まるが、1583 年から 1596 年までででこの日時が火曜なのは 1586 年だからである。したがって、かのアルファベット付記は筆写した者が書き加えたことになる。

マルコルムは、『七賢人の対話』が『自然の劇場』と多くのデータを共有しており、どちらが先に書かれたかを断言することは難しいと述べている[9]。同じ問題は『パラドックス』（1591 年に 8 月には完成していた）とのあいだにも存在している。マルコルムは、伝記的な事実から『七賢人の対話』の完成は 1590 年の 1 月以降のことだと推定する。1590 年 1 月に、ボダンは「異端であり魔術師」として当局に告発されている。入念な家宅捜索の末、何冊かの禁書が発見され然るべく焼かれた。しかし、彼はうまく自己弁護しおおせ、いかなる刑罰に処されることもなかった。もしこの捜索が『七賢人の対話』の重要な部分をひとつでも暴露していたなら、彼がこのように無罪で済

Journal of the Warburg and Courtauld Institutes, LXIX, 2006, p. 99.

[7] 清末尊大『ジャン・ボダンと危機の時代のフランス』木鐸社，1990 年, pp. 515-516.

[8] ボダンのテクストを校訂したベッリォもこの点について触れている．写本の中には「1588 年」と記載されているものがあることに加え，『七賢人の対話』の方が『自然の劇場』より反コペルニクス的な見解を示しているため、後者の方が後に書かれたであろうと述べる. François Berriot, ≪La fortune deu Colloquim heptaplomeres≫, dans François Berriot (éd), *op cit*., XLVI.

[9] Noel Malcolm, *op. cit*., p.99

んだとは想像できないとマルコルムは述べている[10]。「重要な部分」とはキリストやカトリックの教義を批判している部分のことであろう。

2　概要

この作品は対話篇である。それぞれが異なった宗教的信条をもった7人の知識人たちが、さまざまなテーマについて各々の見解を開陳する。その7人とはカトリック教徒のコロナエウス、ルター派のフレデリクス、カルヴァン派のクルシウス、ユダヤ教徒のサロモン、イスラム教徒のオクタウィウス、全宗教を熱烈に支持するが形式には無関心なセナームス、そして自然宗教論者のトラルバである。この7人のそばに、賢人たちの対話を書き綴り祖国の友に書き送っている「私」がいる。物語の舞台は、宗教戦争の最中のヴェネツィアにあるコロナエウスの館である。ここで彼らはおのおの学究生活を送っている。それぞれ関心分野も宗教も異なる彼らではあるが共通の学芸を身につけており、友好的な雰囲気の中で共同生活を送っている。

本書は全6篇から構成されている。「私」の朗読していたプラトンの『パイドン』がエジプトのミイラに触れたことから、対話が始まる。第1篇ではオクタウィウスがこっそりミイラと共に船に乗っていた時の話が披露される。船が激しい嵐に襲われ難破しそうになったときに、乗客たちはそれぞれの神に心から祈った。「ミイラをもっている人がいるなら捨てなさい」という者がいて、オクタウィウスは夜陰にまぎれてこっそり隠し持っていたミイラを棄てた。すると嵐が止んだ。このできごとから、コロナエウスは2つの問題を提起する。①なぜエジプト人の遺骸が嵐を呼ぶのだろうか。災いは悪霊の力によるのか、それとも自然学者がいうような発散の作用なのか。②さまざまな宗教がある中で、神が港まで導いてくれたのはどの祈りのおかげなのか。

続く第2篇、第3篇では形而上学の問題が主として扱われる。ここで言われていることを要約すると、神は自由であり、自然界の法則を変えることができる。神のみが賞賛や祈りに値し、人間は奇跡を信じるべきである。また、善霊と悪霊、悪魔と天使は神の命によって、地上に雷や嵐や地震をもたらす。自ら手を下すのではなく、悪魔

[10] *ibid.*,p.100.

や天使を使った方が神の威厳が増すとサロモンは言う。善人と悪人の死後の魂の行先についての議論もあり、善人の魂は死後に天使か星になり、邪悪な者の魂は悪魔になり、貪欲な者の魂は無に帰すと述べられている。メナールも指摘しているが[11]、ここでの議論は『妖術師の悪魔的狂気』および『自然の劇場』での記述と重なり合う部分が少なからず看取される。

第 4 篇から第 6 篇までは神学と宗教をめぐる対話となっている。宗教的寛容、最善の宗教は何かについての議論、そしてキリスト教に対する批判的な吟味がテーマである。真の宗教がどれかなどわからないのでトルコやペルシアのようにお互いを認めて共存するのがよいとする主張（セナームス）がある一方で、多様な神を認めると真の神への信仰が廃れることになるとの意見もある（トラルバ）。最も古く最も善い宗教はアダムやアベル、セトやノアの宗教であり、これが損なわれたときに不幸に見舞われたというトラルバの意見には、サロモンも賛成する。宗教に関しては、新しいものがより善く真なるものであってもそれを公的なものにすべきではないという発言がなされる。なぜなら、それが根付かない状況下で人間は真と偽のあいだをふらつくことになり、そのとき悪魔がとりつくからだ（フリデリクス）。サロモンによれば、最も隠された自然の秘密は神法の中にあり、どの宗教が真なのか迷うときは神に祈るべきである。第 5 篇以降で繰り広げられるキリスト教批判の中心にはイエスの神性否定があり、三位一体やキリストによる贖い、原罪も否定されている。

3　誰がボダンなのか

多くのボダン研究者がこの問題に関心を寄せ、さまざまな解釈を残している。ユダヤ人サロモンがボダンだとする説（シャプラン）、自然哲学者トラルバがボダンだとする説（ディックマン）、サロモンとトラルバの 2 人（ベツォルト、佐々木毅、ボードリヤール）、誰でもなく外側から見ているとする説（グロイアー、クンツ、五十嵐豊作）、「私」だとする説（清末尊大）。当然の帰結として、どの説をとるかによって全く異なったボダン像が描かれる。例えば、アカデミーフランセーズの創設者であるシャプラン

[11] Pierre Mesnard, ≪Pensée religieuse de Bodin≫ dans *Revue de seizième siècle* 16, 1929, p.95.

は、ボダンを「隠れたユダヤ教徒」であり、『七賢人の対話』がそれを証明していると述べているが[12]、これはサロモンにボダンの姿を求めたためである。また、ボダンをトラルバと同一視したディクマンは、1684 年に『ボダンの自然主義』という著作を刊行して注目を集めた。ここでボダンは単純な自然主義哲学者として取り扱われた[13]。

清末によれば、ボダン＝サロモン・トラルバ説が主力な見解であり正確に的を射ていることは確かだが、それには決定的な欠陥があるという。いくつかある問題点のうち清末が「何より駄目」と評したのは、「トラルバ、サロモンだけを抜き出すという最も安易な方法をとって、硬直したボダンのカバラ神秘主義なる宗教思想をでっちあげることである」[14]。清末の綿密な分析によれば、一貫してボダンを代弁しているのは隠された自然の奥義と神の秘密に通じたサロモンであり、次に自然＝理性段階にとどまっているが自然学に通じたトラルバが発言力をもっている。しかし、場面に応じて、ボダンは自説をしかるべき人物の口から語らせている。たとえば、悪魔や妖術師についての議論においては、ルター派でこの分野に明るいフリデリクスがボダンの見解を述べることが少なくない。七賢人の対話を書き綴っている傍観者である「私」がボダンだと清末は結論しているが、妥当な見解であると考えられる。

かつて五十嵐豊作も記したように、ボダンの宗教思想は、7 人の対話者たちの誰かひとりによって語られているわけではない。ボダンは自らの思うところを「あれこれの対話者たちに変現しながら、語っているのである」[15]。ボダン本人は決して表に出てくることはないが、先立つ諸著作の中で顕示された彼の宗教観や思想から、読者はどの語り手の発言にボダンが「のりうつっているか」を文脈の中から見定めるべきである。

4　対話の結末

ボダンは『国家論』において、宗教が国家や体制の維持に役立つものであり、この

---

[12] *Lettre de Chapelain à Conringius*, 1 juiillet 1673, dans Roger Chauviré, *Jean Bodin, auteur de la ≪République≫*, Paris, 1914, p.537.
[13] Henri Baudrillard, *op.cit*., p.193.
[14] 清末尊大, 前掲書, p.425.
[15] 五十嵐豊作「ジャン・ボダン『ヘプタプロメレスの歴史』」『法政論集 53』, 1971 年, p.22.

ような神聖なものが軽んじられたり、議論によって疑われたりしないよう注意しなければならないと明記していた[16]。『七賢人の対話』においても、サロモンが「議論することからは意見が生まれ、人の精神は真か偽かを疑うため、この不確実さが不敬神をもたらすことになる」と述べている[17]。しかし、各々が自らの信仰を確信しつつも友愛で結ばれた賢人たちは、真の宗教は何であるかをめぐって議論をくりひろげる。最終的に、彼らのあいだで統一見解が打ち出されることはない。この対話篇の中には、プラトンのそれの中におけるソクラテスの役割をになう登場人物は不在なのである。物語の最後では、コロナエウスの館の子供たちによる「詩編」133 をモチーフにした合唱を楽しんだ賢人たちは、互いに愛情もって抱擁を交わしたあとで別れる。その後も彼らは共に暮らし研究にいそしむが、宗教に関しては一切討論することはなく、それぞれが自らの宗教を敬虔な生活によって保持したと語られている[18]。

この結末からは何を読み取ることができるだろう。ショーヴィエが言うように[19]、宗教について議論することは結局無駄であるからこそ、寛容が必要不可欠だということに尽きるだろうか。この見解には確かに一理ある。だが、この場面に関しては他の解釈もなされている。ビルーストゥは、このラストシーンについては、①すべて語られた、②もはや語るべきことはないという解釈の可能性があるとした[20]。前者において場面は固定化されて終わるが、後者においては声が超越的な現象性へと変化したために、宗教的沈黙は栄えある領域への到達の行為だととらえられている。

ベルナールは、別な説明を試みている[21]。彼女は、賢人たちが互いに宗教についてもはや語らないのは、彼らの言葉に対する反響を待っているからではないかと述べる。なぜなら、コロナエウス邸で起こったことは、朗読者として迎えられている語り手（すなわち「私」）によって外部に伝えられている。これは七賢人の世界が洗練された知識の持ち主ではない者たちにも開かれていることを意味しているとベルナールは言う。

---

[16] Jean Bodin, Les six livres de la *République*, Paris, 1576 (La dixième édition, paru à Lyon en 1593), Paris, p. 206.
[17] François Berriot(éd), Jean Bodin, *op.cit*., p. 201.
[18] *ibid*., p. 569.
[19] Roger Chauviré, *op.cit*., pp.105-106.
[20] Jaques Birouste, ≪L'Enigme d'anthropologie religieuse dans le Colloquim heptaplomeres≫, *L'œuvre de Jean Bodin, dans Acte du colloque tenu à Lyon à l'occasion du quatrième centenaire de sa mort, 11-13 janvier 1996*, Paris, 2004, p. 499.
[21] Mathilde Bernard, ≪Le Colloquim heptaplomeres ou l'exil de la tolérance≫, dans *Papers on the French Seventeenth Century Literature*, vol.XXXVII, n°73, Tübinge, 2010, pp. 405-406.

賢人たちが反響を待って沈黙しているという点には同意しかねるが、賢人たちの一見閉ざされた世界が実は開かれたものだとする解釈は興味を引く。民衆が賢人たちに倣って他者を尊重する調和的な世界を構築できるとボダンが考えていた可能性は低いだろう。なぜなら、ボダンは民衆の間で宗教論争が行われた場合の弊害を熟知していたからである。無論、宗教戦争に翻弄される人生を送り、秩序の回復と平和を願うボダンが賢人たちの調和的な世界が現実世界に及ぶことを願っていた可能性は否定できない。

むすびにかえて

晩年のボダンはキリスト教からだいぶ離れており、『七賢人の対話』の中でもキリスト教、特にカトリックの教義や儀礼を批判するような箇所が多々見られる。とはいえ、死に臨み、彼はカトリックとして埋葬されることを希望し、それはかなえられた。この行動を「公的外面的には偶像崇拝を行いつつも内面的には唯一神を信じることが許される」との自らの信条に殉じたとするのもひとつの解釈である。しかし、別な可能性もあるように思われる。すなわち、ボダンは衆目を気にかけ、教会関係者を欺くためだけにそのような行動をとったと断定することはできないであろう。メナールは、ボダンにおいて教会は真実と霊的な力の源泉としてもとらえられていると述べている[22]。また、ボダンのリーグへの加担について彼の書簡をもとに考察したボルドウィンは、ボダンがカトリックを単に最善の「国家の宗教」ととらえただけではなく、はるかに深い意味でカトリシスムがフランスの歴史であり運命だと考えていたに違いないと考察している[23]。

神がその意志により善霊と悪霊を用いてこの世界を運営しているとボダンは考えていた。幾多の苦境に見舞われながらも連綿とカトリック教会が続いてきたという事実に、ボダンは神の計らいを見たのではないだろうか。ボダンは秩序の維持や道徳の向上のために都合の良いものとしてのみカトリックに期待を寄せていたわけではなく、

---

[22] Pierre Mesnard, *op.cit.*, p. 120.
[23] Baldwin Summerfild, ≪Jean Bodin and the League≫, *The Catholic Historical Review* 23, 1937, p. 184.

調和のもたらされる場としてこれを選択したと推測される。そして、このことは『七賢人の対話』の舞台がカトリックのコロナエウス邸に設定されていることがこれを象徴しているように思われる。また、コロナエウスがこの対話の中で果たしている役割も無視できない。対立する見解のために対話者たちの議論が辛辣なものとなったとき、コロナエウスは間をとりもつような発言をする。彼はサロモンらのように、長々と如才ない発言をあてがわれることはないが、7 人の中にあっては調停者、すなわちハーモニーを生み出す重要な役割を果たしている。ここには、ボダンのカトリック教会に対する思いが投影されているのではないだろうか。